第六学年　国語科学習指導案

日時　平成十五年十月一日（水）
場所　六年生教室
学級　六年生（男四名、女七名）
指導者　青沼　徹

一　単元名　一　生き方や考えを読みとろう
「海の命」（物語）

二　単元について

（一）児童観

十一人と少人数の学級であるが、仲が良く何事にもまじめに取り組み、素直で子どもらしい。学習にも真剣に取り組もうとするが、積極的に発言できる児童は、少数である。他の児童は、じっくり考えてから手を挙げたり、控えめでみんなの前で自分の考えを発表することに消極的であったりする。あるいは、はずかしがって語尾の小さくなる児童もある。人前で自信を持って発表できるように、一分間スピーチに取り組んだり、学習に発表場面を設定したり、友だちの前で話す機会を増やしている。また全校で音読にも取り組んでいる。毎日カードを通して練習しているので、すらすら読める児童は多い。

児童は5年生で学習した「新しい友だち」「プラムクリークの土手で」などの作品の中で、ある出来事や時間の経過の中で主人公が変容することを学んだ。また「一つの花」「わらぐつの中の神様」では題名にこめられた意味を考えてきている。六年生では、「やまなし」で物語文の学習をしてきた。その結果、色彩や対比に着目したり、美しい情景を想像したりできるようになってきた。しかし、登場人物の成長や考えを読みとる学習は、六年生になって、初めてである。文章に書いてある言葉から心情を探ることに関しては、文章そのものをなぞって発言するだけで終わったり、直感的であったりして、叙述の細部から検討することは苦手である。主題の把握についても抵抗が大きい。

（二）教材観

「海の命」には主人公太一の人間的な成長が書かれている。父の死後、その父のような漁師になることを目標にしてきた太一が、海の底でクエに出会い、父もクエも、そしてまた自分も海の命であり、海に生かされていることに気づかされ、共生していこうとする内容である。

この教材は、六つの場面からなり、太一の少年期から始まり、青年、壮年になるまでの生涯が、時間の流れに沿って描かれている。それぞれの場面を貫いて流れるものは、一人の少年の、父親たちが生きた海に寄せる熱い思いであり、父の死を乗り越え、父をしのぐ漁師を目指した成長の姿である。したがって、それぞれの場面での登場人物の生き方や考え方を「海の命」という言葉とのかかわりでとらえていくことができる。太一はクエを捕らえるであろうという読み手の予想を裏切り、クエを生かす場面に作品の主題が表現されている。ずっと追い求めてきた夢と対面しながらも、あえてその夢を捨て去り、さらに大きな夢をつかんだところに太一の大きな成長が表現されている。児童にとってこの作品は主人公太一の成長を読みとることを通して、太一と自分を重ね合わせ、自己の成長の姿を見つめていくことができ、この時期の児童に適した教材である。

（三）指導観

この教材では、「読むこと」に重点をおいて指導したい。第二次では登場人物の言葉や行動に着目し、太一の成長する過程を読みとっていく。六年生であるからできるだけ自分の力で読みを深めさせたい。そのためにワークシートを用いて、全員に確実な読みをさせたい。場面ごとに小見出しをつけて、物語の全体構造についても把握させていく。場面の構成をとらえやすくするために絵本の挿絵を活用する。板書やワークシートで挿絵を使い、読みの不十分な児童への支援としたり、理解している児童には、自分の読みを確認する手立てとしていきたい。またワークシートをもとに主題について読みを深めていく。話し合いはポイントを絞り、友だちの考えと自分の考えとを比べながらお互いの読みを交流するという意識で行わせるようにしたい。

第三次では、同作者の作品「山のいのち」を読み、「海の命」と比べて気がついたことを話し合ったり、作者に興味関心を向けさせたりしたい。また、これまでの読書経験から「命」をテーマとした作品を探し、紹介し合うことで、読書について意欲を持たせたい。

三　単元目標・評価規準

単元目標　◎登場人物の言葉や行動から、生き方や考え方を読みとり、「命」について考える。

関心・意欲・態度	読むこと	言語事項
◎自分の力で作品を読み深め、主人公の成長について興味を持って読もうとしている。	◎登場人物の生き方を、その言葉や行動から読みとっている ・自分の考えを広げるために、同じ作者の作品や「命」をテーマに読んでいる。	・複数の読み方に気をつけて、漢字を読んだり書いたりしている。

四　単元の指導・評価計画（六時間扱い）及び評価規準

次・時	学習活動（指導内容）	評価規準 関・意・態	評価規準 読むこと	評価規準 言語事項
第一次 1	・「海の命」全文を通読する。 ・新出漢字の練習をする。 ・語句の意味調べをする。 ・学習の見通しを持つ。	○これまでに学習した漢字や新出漢字・言葉に気をつけて新しい作品を読もうとしている。		○当該学年までに配当されている漢字の読みや漢字の音読み・訓読みが分かっている。
第二次 2	・主人公の成長を中心にワークシートを使って作品を読み取る。		○人物の言葉や行動の叙述に即して、人物の心情、生き方や考え方をとらえている。	○場面の構成について理解している。
3	・ワークシートをもとに、「太一の周りの人々が成長にどう関わっているか」読み深める。	○文章を読み、人間の生き方や考え方について自分の考えを深めようとしている。	①主人公の成長について、自分が読みとり、考えたことを出し合い読みを深めている。	○当該学年までに配当されている漢字を、音読み・訓読みに注意して読んでいる。
4 （本時）	・ワークシートをもとに、「太一のクエに対する考えはどのように変化していったか」読み深め、海の命について考える。		②読み深めたことをもとに「海の命」について考えることができる。	○当該学年までに配当されている漢字を読んでいる。
第三次 5・6	・立松和平の他の作品「山のいのち」を読み、「海の命」と比べて考えたことをまとめる。 ・これまでの読書経験から「命」をテーマとした作品を探し、紹介し合う。	○学校図書館などを利用し、自分の考えを広げるために読書をしようとしている。	○二つの作品を読み比べて考えたことをまとめることができている。	

五　本時の指導（4／6）

（一）授業の構想

一人一人に自分の力で確実な読みをさせたいという思いからワークシートを用いて、太一の成長の過程をとらえてきたが、読みの程度には、違いや個人差が見られる。そこで、ワークシートをもとに読みを深め合うことにした。

話し合いは、自由に話せる雰囲気を作るため、まずは小グループで行う。その際は、主題に迫れるように話し合いのポイントを絞り、友だちの考えと自分の考えとを比べながらお互いの読みを交流するという意識で行わせたい。また話し合いの最中は、机間巡視を行い、個別に指導するとともに、全体で確認しなければならない事柄が出てきたときは、必要に応じて、後の全体の話し合いで取り上げ深めるようにする。次に全体で話し合う場面を設ける。ここでは、太一のクエに対する考えの変化と心の成長を押さえながら、「海の命」が何を表しているのか、児童に考えさせることで、主題について迫りたい。

（二）目　標

自分の読みを友だちの読みと交流することで、太一の成長していく姿をとらえ、海の命について考えることができる。

（三）展　開

	段階	学習活動、主な発問・指示（○） 予想される子どもの学習状況	教師の支援（○） 指導上の留意点（・）	評価基準（A～C） 評価方法○手立て＊
（一）	導入	一、前時の想起をする。	・前時は、「太一が周りの人々との関わりによってどのように成長したか」、1～4の場面まで各自の読みをもとに読み深め、まとめたことを確認する。 ○壁面掲示を使って前時の学習を想起する。	
（二）		二、学習課題の確認をする。 太一の成長する姿について読み深めよう。 （読み深めのポイント） ○太一のクエに対する考えはどのように変化していったか。	・学習課題を提示する。 ・本時はポイント②について読み深めることを確認する。 ・本時の学習の中心は5の場面であることを確認する。	
（五）		三、学習場面を音読する。	・クエに対する太一の気持ちに気をつけて	

	四、太一のクエに対する考えの変化を読み深める。 ○夢が実現したとはどういうことでしょう。 ○どんなクエか分かるところを見つけよう。		
開 (十二)	(1) グループで読みの交流をする。 ○岩のようなクエを見て、太一はどんなことを思ったのか分かる文を見つけ、そのときの太一の気持ちや考えの変化を話し合いましょう。 ・おとうのかたきを討つぞ。 ・やさしそうな目だな。こんな目で見られたら殺せない。 ・おとうの目みたいだ。 ・まるで自分に殺されたがっているようだ。 ・どうして逃げないのか。 ・この魚をとらえなければ、一人前の漁師になれない。 ・今までの魚とは違う。 ・このクエを倒すことは、自分の夢だったはずなのに。 ・これは、おとうなんだ。ここにおとうはいる。会いたかった。 ・おとうぼくは漁師になれました。 ・この大魚は海の生き物を守っているのだ。	5 の場面を音読させる。(指名読み) ・父のかたきであるクエに倒すことが太一の夢であったことを想起させる。 ・段落21、22の一斉読みを行い、クエの大きさをとらえさせる。 ・2つのグループで話し合う。 ・司会の児童を中心に話し合いを進める。 ○ワークシートを手がかりに、太一の言葉や文を抜き出し、クエに対する考えを話し合う。 ・友だちの考えと自分の考えを比べながら聞き、ワークシートに印をつけたり、書き込んだりさせる。	
展 (十三)	○クエに対する考えはどう変わりましたか。 (2) 全体で読み深める。 ○太一のクエに対する考えが変わったのはいつですか。 ・太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出したとき。 ○どうして太一はクエにもりを打たなかったのでしょう。 ・全く動かないクエを殺すことはできない。 ・クエを父のかたきでなく、父親だと思った。 ・このクエをただの魚ではないと思ったから。 ・与吉じいさが「千びきに一びきでいいんだ。」と海を大切にすることを教えてくれたから。 ・クエを海の守り神だと思ったから。 ・クエを「海の命」だと思ったから。	○机間巡視をして、うまく発表できない児童を指導したり、全体で深める必要がある事柄を確認したりする。 ・太一のクエに対する考えが、父のかたきから少しずつ変わっていったことをとらえさせる。 ・「泣きそうになりながら」も「ふっとほほえ」む太一の行動から、クエへの気持ちが大きく変化したことをとらえさせる。 ・クエの命が「海の命」にかわった瞬間、父親の命と重なって見えたこと。さらに与吉じいさや母親、そして自分自身の命であり、自然の命であることに気づいた太一の心の成長をとらえさせる。	(①について) A 太一のクエに対する考えが変化したことや成長を文章からとらえて発言したり、友だちの考えと比べながら聞いたりして自分の読みを深めている。 B クエに対し、太一の考えが変化したところを見つけることができる。 (○発言・ワークシート) Cへの支援 太一の言葉や行動に目を向けさせるように助言する。
終 (二)	五、学習のまとめをする。 (1) 本時までの学習を振り返る	・太一の成長に周囲の人間がかかわってきたことや、クエに対する考えの変化から、父を越える漁師に成長したことを確認する。	(②について) A 海に生きる生物の命であり、おとうや与吉じいさの命。自然のあらゆる命ととらえている。 B 海の生き物たちの命、またはおとうや与吉じいさの命とどちらかをとらえている。 (○シート記述) Cへの支援 大魚ととらえた児童には、板書や教科書によって、海の命の表す意味に幅広く気づかせる。
末 (八)	(2) 学習のまとめを書く。 ○「海の命」とは何を表しているのですか。 ・海に消えていった生き物たちの命。 ・海に生きた、おとうや与吉じいさの命。 ・自然の命そのもの。	・板書やワークシートをもとに「海の命」の表す意味を自分の言葉でワークシートにまとめて、発表させる。	
	六、次時の内容を確認する。	・次時は、同作者の作品である「山のいのち」を読むことを伝える。	